

## 特別講演

# 日本におけるモダニズム作家について

## Japanese Modernist Writers

ドナルド・キーン\*

### Abstract

Many Japanese writers of both poetry and prose were attracted by the new literary techniques that came into prominence in Europe after the First World War. At first these "modernist" writers learned only haphazardly (usually through translations) of new developments, but by the early 1930s there were Japanese students of Joyce, Proust and other modern writers who attempted to bring Japanese literature into what had become the mainstream of world literature. On the whole, these experiments were failures, and the best works by their respective authors were in more traditional styles, but the experience with modernism enriched not only these authors but those of the postwar era.

Of the many modernist writers who might be considered, I have chosen four as being representative of different aspects of the movement: Satō Haruo, Yokomitsu Riichi, Itō Sei and Hori Tatsuo. The place of modernism in their works is the subject of my paper.

---

※ Donald Keene [現職] コロンビア大学教授

モダニズムの定義はいろいろあると思うが、過去の文学に対する挑戦であり、現代的な言葉や着想で現代の人間の心に訴えるという意味を帯びているであろう。現代ぶっついて、たとえ内容そのものに新鮮さがなくても、常識に反するような言葉遣いで読者をびっくりさせ、陳腐な作品にモダニズムのお化粧するような場合もあるが、無意識的なモダニズムは最も多く、それに抵抗することは案外むずかしい。明治初期の日本の作家はどのように新しい時代を嫌っていても、また、どのように新しい言語や風俗を避けようと思っても、最終的には降参したり、または奇人として淋しい生活をするのを余儀なくされた。大沼枕山のように、死ぬまで東京を江戸と称し、丁髷姿を変えなかった人は偉いと言えは偉い。だが、時代遅れと言わなければなるまい。河竹黙阿弥は新しい時代を理解できないと言いながら、散切りものもかなり書き、「活歴」という新しい歴史観に基いた歌舞伎も書き、自分の戯曲が現代人の要求に応じられるように、横浜へ行行って外国人が演じたシェクスピア劇を見学した。言うまでもないことだが、黙河弥のモダニズムには何も思想的な背景はなかった。営利主義的関心しかなかったと思われるが、結果として最も健全なモダニズムの一形式ではないかと思われる。

ところが、日本文学におけるモダニズムと言うと、大概、大正末期から昭和10年ごろまで一つまり、1920年から1935年の15年間一書かれた文学を指しているようである。その時代の文学について書く専門家の多くは、当時の文学に3つの主な流れがあったように説明しがちである。即ち、プロレタリア文学と新感覚派文学と私小説であるが、人によっては私小説の代りに在来のブルジョア文学として説明している。その時代の研究者として当然な考え方だと思うが、われわれ現代の読者にとっては余り意味がない。何故なら、プロレタリア文学にしても、新感覚派文学にしてもまだ読み甲斐のある作品は殆んどなく、私小説またはブルジョア文学として簡単に片付けられない作品だけしか残っていないという印象を受けやすい。別の言葉で言うと、プロレタリア文学運動もモダニズムを唱えた新感覚派運動も悲惨な失敗に終り、情

性で残ったのは在来の文学だけであったということになるが、大ざっぱに言えば全くその通りである。ところが、いわゆる在来文学または私小説が大正初期のまま残ったかどうかということになると、明かに違っていた。要するに、どんなに日本の伝統を守ろうとした作家でも、同時代の文学の影響をかなり受けたし、又、実を結ばないまま死んでしまったと思われるプロレタリア文学運動やモダニズム文学運動は現代日本文学の中にさまざまな形で今でも生きている。私がモダニズム文学について発表しようと思った理由は、その悲惨な失敗に同情する一方、余り認められていない、表面に現われ来なかった成功を指摘したいからである。

狭い意味のモダニズムを日本における根源まで逆のぼってみると、大正10年ごろから日本に入ってきたヨーロッパの詩歌にたどりつく。第一次大戦から生まれたダダイズムやフトリズム等が日本に紹介され、日本の若い詩人たちが真似した。ダダイズムとシュレアリズムの区別をよくわきまえていないような詩人はわけの分らない、何のつながりもない詩句を連ねて、モダニズムを日本で再現しようとした。この実験は失敗に終り、現代の読者がその奇抜な表現を読むと失笑を禁じえないことが多い。ところが、この実験は無意味ではなかった。日本の現代詩の完成のために必要な段階であったと思う他はない。萩原朔太郎の詩ではダダイストたちの失敗が成功に変っている。つまり、狭い意味のモダニズムの詩人たちは失敗したに違いないが、失敗しながらも同時に日本詩人の表現の可能性を拡張したために、違った伝統の詩人が自分たちの目的達成のためにその可能性を役立たせた。

小説となるともっと複雑である。明治時代以来の日本の小説家のほとんど全部の人が何らかの形で欧米文学の影響を受けたことは明白である。そして何十年も前から、国木田独歩とワーズワース、田山花袋とモーパサンというような比較文学的な研究が継続的に行われてきたようである。正直言って、私はそういう研究についてかなりの疑問を持っている。本当の影響はそれ程簡単なものではない筈だと思う。ある作家が別の作家―自国の先輩にしる、

外国人にしろ一から影響を受けるまでどうしてもその文学を消化しなければならない。アンドレ・ジードはどんなフランス人の作家よりもゲーテやドストエフスキの影響を受けたと言い、自分は小石に至るまでものを消化する能力があると誇らしく書いた位である。大正末期の詩人たちは影響を受けたは受けたが、消化ができなかった。が、同時期の小説家にはもっと消化力が備わっていたと思われる。

佐藤春夫はその1例としてあげられる。彼の出世作「スペイン犬の家」はいかにもハイカラな話であり、奇妙な文体で当時の読者を喜ばせたと思う。それ自体は大した小説ではなく、影響等を探すほどのものではないが、これにも一種のモダニズムが認められる。家主が犬になり、又、犬が人間になるというような幻想的な話は在来の日本文学にないような軽い調子で述べられている。

「田園の憂鬱」はもっと重みのある、密度の濃い作品であるばかりでなく、佐藤の最も有名な小説である。この小説には確かに私小説と思わせるような要素が目立っているが、自虐的な白状という伝統的な私小説とは縁が遠い。世紀末的な雰囲気はただよう、幻想的な小説である。この小説はゲーテの直接的影響の下で書かれたと力説する学者がいるが、オスカー・ワイルドの直接的影響の下で書かれたという優れた論文もある。ゲーテとワイルドは共に全く相入れないような存在だと思うので、もし佐藤が両方の影響を同じ程度に受け入れたとすれば、小説は支離滅裂なものになった筈である。直接な影響はともかく、間接的な影響は勿論いろいろあったし、「田園の憂鬱」の完成には不可欠の要素であったと思うが、佐藤が誰から何を学んだかということ調べるよりも、「田園の憂鬱」の文学的価値を定めた上、日本文学に新しいものをもたらしたかどうか、ということの問題にした方が正しい研究の順序ではないかと思われる。

「田園の憂鬱」はモダニズムだと言う学者は少ないと思うが、モダニズム主義者として知られている横光利一や伊藤整の初期の作品と余り変わらないと

思う。佐藤は文章に詩的な美しさを施し、文体の飛躍や常識に反するような観察で単調な田舎の滞在に深みを与え、何でもない小さな出来事に象徴的な意義を持たせた。モダニズムの文学者たちには全く同じ狙いがあったが、「田園の憂鬱」ほど成功した作品は極めて少ない。

それなら、佐藤春夫をモダニズム作家として考えていないのはどういうわけだろうか。多分一番の原因は直接的真似がないからであろう。つまり、充分な違和感がなく、自然な日本語であり、モダニズム臭くないということである。佐藤はぎごちない過渡期を乗り越えて文学を創作することに成功した。残念ながらそれは一回だけの成功であった。「田園の憂鬱」の続篇と言われている「都会の憂鬱」にはもう散文詩的な要素がほとんどなく、私小説を嘲笑しつつ同時に私小説に近づいたのである。

しかし、佐藤春夫は不思議なほど多才な作家であったため、別の意味のモダニズムがその後の小説に見分けられる。例えば、「F O U」(大正15年)には気違いの眼で見た世界が反映されており、ドイツの表言主義の傑作である「カリガリ博士」(1919年)という映画の世界をみごとに画く。「ノンシヤラン記録」(昭和4年)は未来の話であるが、人間が定められた階級によって地上または地下に暮し、地上の人でも身分によって割り当てられた日照しか受けられない。最後に、人口過剰を和らげるために、下層階級の人々に手術を受けさせて植物になるように契励する。佐藤はハックスリの「すばらしい新世界」を真似したらしいが、実は、「ノンシヤラン記録」はそれより3年前に発行された。安部公房の文学にもこれと非常に近い面があるが、影響は先ずなかった。

佐藤の小説である「更生記」(昭和4年)は精神分析によって女性のヒステリーが治されるという筋書きである。フロイトの理論を小説の重要なモチーフとして使用したのは最初の一例ではないかと思う。成功作だと言えないが、モダニズムの点から見ると、先駆的小説に違いない。そればかりではなく、現在でもフロイトの方法を充分生かした作家は不思議に少なく、評論家

の間でも、漱石あたりの精神分析を試みても、もっと近い時代の作家の精神という聖地に闖入するのは遠慮しているようである。

佐藤の作家としての想像力がだんだん枯れてしまったが、「女人焚死」(昭和26年)はノン・フィクション小説として非常に早い作品であり、世界的な基準から言ってもモダニズムの文学であると言えよう。

しかし、日本のモダニズム・イコール・新感覚派という立場に立って書く評論家が多く、1924年から1930年に至る期間がモダニズムの時代であったように説明している。もっとはっきり言うと、モダニズムは「文芸時代」という同人雑誌はモダニズムの中心的機関誌であり、同人の中でも横光利一だけが新感覚派主義を具現したと言われている。私は横光の文学論を多少読んだことがあるが、意味の不明なところが多く、果して何を言おうとしているか全く分らない部分が少くない。「頭ならびに腹」は「文芸時代」の創刊号を飾り、相当の問題作であったようである。現在読んでみても、当時の読者が何に驚き、何に感心したか、想像がつかない。誰か信用できる評論家の注釈を読まない限り、その文学的な良さやモダニズムに気がつかないのではないかと思う。

横光は日本のモダニズムであると言われているし、又、事実そうであるかも知れない。ただ、佐藤春夫と違い、横光の最も優れた作品はモダニズム文学とかなり違う系列のものである。横光は非常に才能に恵まれた作家であったが、その才能をフルに使ったのは稀にしかない。失敗作にすばらしい部分があり、その部分を味うために作品全体を読む値打ちが充分ある。が、何と言っても、才能を浪費したという印象を受け、その後の文学に対する貢献は少ない。佐藤の無意識なモダニズムと比較し、横光のモダニズム主義は頼りないものに思われる。

伊藤整も一応モダニズムの作家である。横光より僅か7年後に生まれたが、その落差は決定的なものであった。横光のモダニズムはフローベルの「サランボオ」の日本語訳やポール・モランという忘れられた小説家から受け継い

だものであったが、伊藤はジョイスやローレンスの翻訳者であり、「我が芸道の師ジョイス」という論文を書いたほどである。残念ながらジョイスを匂わせる作品はなく、どう考えても、伊藤は芸道の師として自分の性格に大変遠い作家を選んだという他はない。

伊藤のデビュー作品は、「感情細胞の断面」という短篇であった。昭和5年5月に発表された作品であり、川端康成はその欠点を指摘しながら心理的描写の新しい方法に関心を示した。これは明かにフロイトの影響の下で書かれた、相当思い上った書きぶりである。例えば、小説に登場する人物の一人で、友人の最近の詩には恋人のマサ子の名前と関連のあるマサ、ムサ、ミサ等の音が27回出るが、正子に会う前の詩には同じ音が5回しか出ていない。彼の手記には、「フロイトに依ると繰り返して物を忘れるのはその行為をしたくないという潜在意志の現われなのである」というような知識を織り込んでいる。手記の文章をカタカナで書き、公の発言をひらがなで書くことも、オニールの芝居の脚本を思い出せるが、同じような影響を受けたとは言え、伊藤の方法はいかにも幼稚であると言う他はない。

ジョイスの影響の極端な例として「M百貨店」（昭和6年）という短篇がある。

〔フランスから、パリからそれ等は来てゐる。髭の美しいフランスの男達。ウピガンとコティ。オオ・ド・コロニューで身体を拭くことが非常に健康に宜いと、ボナパルトは考へた。佛和獨習書の中の文章〕等々

伊藤自身は「M百貨店」を未熟な作品と評価し、余りにも機械的で、単調すぎた作品であったため、個性がないと認めていた。モダニズムがあふれるばかりの書きぶりで、時々読者は笑わざるを得ない。ところが、私はこの小説をさげすむ気にならない。むしろ、後年の成功した小説と比べてみると、文学的な関心が高く、通俗的ではない。

「生物祭」（昭和7年）は伊藤が書いた最もよく出来た小説の一つと思われる。父の死を描いたこの作品はジョイス風の意識の流れによって統一され、

テーマを深めている。

「此處は闇の中だ、と私は自分に言ふ。この強烈な匂に溺れるがいい。此處には匂のほかにも何もないのだ。私の頭を勝手に酔はせるがいい。父はどうしてゐるか。眠って、死の前の不安な呼吸を喘いでゐる。お前は誰だ。その父の子だ。今死なうとしてゐる者の子が此處の花のなかで眼をつぶってゐる」

ブルーストの影響が現われている小説もこの時代に書かれた。「アカシアの匂に就いて」は次のような文章で始っている。

「並樹の太いアカシア等は花ざかりである。その白い花房の咽せかへる匂がS市の夜の街を窒息させる。それは私の嗅覚を刺戟して、4年前に私がこの街でした恋愛の強烈な感情を私の記憶中枢に目覚ませる」

私は伊藤整の初期の作品だけにピントを合わせたのは、モダニズムの傾向をよりはっきりさせるためであるが、伊藤の一番の傑作は同じ影響を受けた小説である。「幽鬼の街」（昭和12年）では伊藤が生まれた小樽がジョイスのダブリンのような町に描かれ、ジョイスの手法を上手に活用した。冒頭の自然主義的な描写がいつの間にか幻想的なものになり、現実を越えていく20世紀文学の作品である。伊藤自身は、「幽鬼の街」だけが「多少ものになっている」という意見を洩したことがあるが、その通りだと思う。ジョイスを真似ることによって伊藤は自分の内的傷を表現した。その点では、西欧の象徴主義詩人を真似して始めて自分の感想を思う存分に表現できた明治の詩人と共通の経験をしたのである。

伊藤はだんだんモダニズムから遠ざかり、私小説や風俗小説を書き、ジョイスやブルーストと余り関係のない文学を書くようになった。正直に言って、私は戦後の伊藤の文学を高く評価できない。「火の鳥」は伊藤の自信のある小説だったが、どうしようもない失敗作であると言わなければならない。ところが、昭和28年に発表された小説としては最も評判がよく、青野季吉、河上徹太郎、河盛好蔵、臼井吉見、中野好夫、中村光夫等は、この小説を最高に誉めた。ローレンス、ジョイス、ウールフの手法を合わせた新しい日本の



小説として絶讃されたが、25年後に読むと、全くひどい通俗的な小説だと言う他はない。モダニズムを裏切った小説としてなげかわしいと思う。

私はモダニズム文学の最後の例として堀辰雄をあげたい。堀は伊藤より1年先に生まれたが、もう少しモダニズムの発展した時代を代表しているように思われる。もともと堀はアンチ・モダニズムだと自称し、初期の詩や訳詩は別としてモダニズムを思わせる作品が少ない。出世作はラディゲの影響の下で書かれた「聖家族」であったが、芥川龍之介の死や芥川の紹介で会った松村みね子とその娘のことを描いたものであるから、堀のモダニズムの形式が横光や伊藤と随分違うことが分る。彼ら書いたモダニズム作品の場合は、テーマを手法に合わせた印象を与えるが、堀は書きたいことがあったので、適当な手法を探し出したということで堀文学には以前のモダニズム作家たちの文学になかったような統一性がある。ラディゲの影響を受けた「聖家族」プルーストの影響を受けた「美しい村」モーリアクの影響を受けた「菜穂子」リルケの影響を受けた「風立ちぬ」はそれぞれ違うが、同様に堀文学らしさを保っている。仮に何の影響を受けなかったとしても、彼の文学の性質はそれほど変らなかつたと思う。しかし、在来の文学方法に飽き足らず、堀は病身でありながら、絶えず新しい文学を探し、その文学から学ぶべきものを学んだ。

ところが、堀がある外国の作家をどんなに忠実に読んでも、どんなにその文体の特徴を自分の日本語の中に生かそうと努力しても、外国作家の全作品から自分のために必要な要素しか選ばず、自分の文学の糧にした。自分が消化しないような影響をいつも断った。プルーストの文学を最高に崇拜したが、*mémoire involontaire* 以外にプルーストを思わせる要素は非常に少ない。晩年の堀は何回も何回も「失はれた時を求めて」を読んでいったが、プルーストの原作にあるような激しさは堀には相入れないだけでなく、堀はプルーストと違い、或る世界を再現しようとしなかつた。堀の世界は軽井沢の別荘地であり、小説に登場する人物は極めて少ない。

もう一つの点で堀は佐藤、横光、伊藤のようなモダニズムとは違う。外国の文学や文学を書く人に対しては何のコンプレックスもなかったためか、戦時中、右翼的な本も書かず、聖戦のような言葉をも使わなかった。病身であったことは事実だが、そればかりのことではなかろう。日本で独自の文学を書きながら世界中の文筆家と手を握っているような状態の中で生きていた。

私は堀文学が好きだが、それほど高く評価しない。もう少し広い視野があったらもっと感動するだろう。が、モダニズム文学として最も感動した例の一つではないかと思う。